# 明日香をさぐる

## 飛鳥寺の軒丸瓦～「花組」・「星組」

今回は、飛鳥寺の瓦について述べてみたいと思います。

飛鳥寺の創建時、建物屋根の軒を飾った軒丸瓦には、大きく分けて二つの系統がありました。これらの瓦は、「花組」・「星組」と呼ばれることがあります。「花組」とは、「素弁」と呼ばれる一枚作りの弁の先端に桜花状の切り込みを入れて、花びらのような形をした模様になっているものを指します（写真1）。「星組」は、「素弁」の弁端外側に小さな珠点を持つ模様になっているものを指します（写真2）。

写真１　「花組」軒丸瓦

写真２　「星組」軒丸瓦

これらの軒丸瓦は、製作技法などに各々の個性があって、それが製作工人の違いをも反映しています。写真1の「花組」瓦は、中房と呼ばれる瓦文様の中心付近にみられる円形の部分に、蓮子と呼ばれる小さな乳頭状の円形模様が配置されており、その数は中心から数えて1＋5になっています。初期的な瓦の中房部分は、断面がややくぼんだ形をしていました。瓦当部分と、丸瓦部分の接合方法は、丸瓦の広いほうの先端部分の凸面を広く削り、断面がくさびのような形になったものを、瓦当裏面に押しつけ、さらに後から粘土を貼り付け、なでる、といったものでした。写真3に、貼り付けた粘土をなでつけた痕跡と、丸瓦の先端部分の形をみることができます。もう一方の「星組」はどうでしょうか。写真2の「星組」瓦は、中房部分の断面形が、扁平か、わずかに突出します。瓦当裏面は、中央部分が周縁部分よりも盛り上がり、同心円状のなで痕跡を残すものもあることから、調整に回転を利用していたと考えられています。丸瓦と瓦当部分の接合方法は、丸瓦の筒部先端を端面側と凹面側から切ることで、断面形でみると片ほぞ形にみえる形となっています。この端部を瓦当に押しつけ、薄く補強用の粘土を貼り付けて固定しています。写真4にその断面形と貼り付けた粘土の接合部分にひび割れが生じている状態をみることができました。

写真３　「花組」接合方法

このような、軒丸瓦の瓦当文様と製作手法は、百済をはじめとした韓半島に多く見られることから、日本において独自に発生したのではなく、韓半島から伝わったと考えられています。また、飛鳥寺の建設に渡来系の人々が携わったとすることを裏付ける考古学的な根拠の一つと考えられています。瓦にみられる製作技法の痕跡観察は、寺院研究に多くの情報を提供しているだけでなく、我が国の造瓦技術の始まりやその展開過程を歴史的に考えるうえでも重要な研究要素になります。今後、丹念な観察の積み重ねによって、さらなる研究の進展があるかもしれません。

写真４　「星組」接合方法